

# 断片集

xelt

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

道化、もしくは脚本家。

歯車のように軋みながら回る物語。

歯車仕掛けの夢物語。

彼女はその表現を恐らく嫌いますが。

それだけです。

「きつと私達はそう有れと望まれてここにいるんだよ。素敵でも何でもないハナシだよ  
ね」

# 目次

いつかの過去の明日の話

1

口供

4



# いつかの過去の明日の話

虚構は破られました。

真実は何処にもありませんでした。

理想は遙か未来に吹き飛ばされました。

結局何も変わることはありませんでした。

いつもの様に、いつもの如く。

思考は散らばります。

十字路、交差点。忙しく歩く人々。架空の線と腐った青空が彼らを見下します。

多様な人、多様な影に、多様な道具。時代は変わりましたが、営みは何も変わりません。

道の端で青年が一人、疲労と哀愁の感情を形にして送りました。空にサンドスターが散っていきます。それは私の前で無色になりました。

増幅した感情に対する反応は僅かな煌めきを伴って飛来します。おおよそは同意と同情の感情です。青年は安堵の表情を浮かべます。嘗て見た見た光景の繰り返し。

道のあちこち、建物からも僅かな光景が映り込みます。誰も気には止めません。それ

が当たり前になってしまったのですから。二束三文の懺悔が今日も街を覆います。

紫色の脚本家は誰かの夢想を語りました。すなわち、感情の開放を。それはいつか誰かの語った夢物語。彼女はただそれをなぞっただけ。昨日見た将来のコピー&ペースト。

空に舞う粒子で息継ぎをします。まるで感情を食い物にしているかのようで、些細な罪悪感が私を襲います。けれどそれも時間が押し流し、再び私は私になります。皆の語るような私に。停滞そのものは緩やかに流動し、そして回帰します。

息をしなければなりません。息苦しいように生きて行かなければなりません。都市の影を縫うように泳ぎます。できる限り人の目を避けるように。できる限り人の目に映るように。矛盾した芸当が私に要求されますが、鈍った感性は悲鳴さえ拒みませんでした。街を往く人々の目を移る私は、さぞかし白く綺麗に汚れている事でしょうね。

サンドスターは夢のような物質でした。それは認識でした。それはハシバミの木でした。それは絵筆と紙でした。最後にそれは感情の塊だと認知されました。実態がどうあれ、現実は改変されました。僅かな夢の香りを嗅ぎとったからでしょうか。私には分かりません。

何にせよ、サンドスターは利用されました。鉄の管に通され、循環し、熱を加えて電氣を通し。そんな細々しい実験の果てに些細な技術が生まれました。

感情を直に伝えられるというこの技術は、革命を起こしました。そして既にいくつもの技術が足元で輝いていました。統合されたそれらは正しく夢のようなものでした。

だからそれは誰にも、誰からももてはやされることとなりました。ご大層な無機質の言葉に幾度と無く飾られて、束縛を打ち破る弓矢として。

嘗ての理想を思い返します。

けれど。結局は踊る道化の忠言の果ての果て。惨憺たる末路に成り果てました。片手間に食い潰される消費物。何千の努力を嘲るかのよう。私みたいなのにとつては快適な時代になったのですが。

揣摩臆測の都市伝説と、雑多に消費される感情と。

語られるだけ語られ潰えていった理想論。

何にせよ、もうずっと前に繰り返した事でしょう？

## 口供

夢を見た。

そこは灰に飲まれた都市だった。沈み逝く船の上だった。炭となった家屋だった。星の降り注ぐ丘だった。割れる世界の中だった。

何一つ噛み合わない情景。ただ、どうしようも無い事実のみが羅列されている。

失敗。きつと余は失敗したのであろう。選択肢は提示され、何もかもを救うには余りにも遅すぎたのだろうか。

景色は曖昧に移り行き、最後に燃える針葉樹林を映し出した。木々は火花を散らし、微かに雪を溶かしていく。

炎の裏に人影が映り込む。黒で統一された軍服は不格好な裂け目が幾つも入っていた。腕はあらゆる方向へと折られ、白く染まる吐息は乱れきっていた。

それは過去の自分であった。それは見知らぬ誰かだった。夢を見た。

それはいつかの記録だった。サンドスターの見せる夢。誰かの淡い、苦い思い出。倒れ伏す我が身に雪が降る。呼吸は荒く、浅い。そこには威厳も神秘性も無かった。



これで良かったのだろうか。間違つた道を示してはいないだろうか。皆の安否は。余の従者は。事の顛末は。

まとまらない思考。鈍る痛みと重くなる臉。

一呼吸する度に、大切な何かが消えていく感覚がする。

光が体よりこぼれ落ち、空へと散っていった。

爆ぜる木々の音。降りしきる粒の音。彼方に響く残響。

ふと、雪を踏みしめて歩く音が聞こえた。

夢を見た。

隣には従者が座っていた。最早力の入らぬ手を握りしめて。世界で一番価値のあるものだと言わんばかりに。

「どうして……戻ってきた……？」

声に出した本人が驚くほど弱々しい声。既に生きる事さえ難題となり、それでも尚尋ねずにはいられなかった。

余の爲した事を無碍にするような事を聡明な彼女がするだろうか。

ほんの僅かな時間目を瞑り、そして従者は語り出した。

「……せめて」

不安げな細かい声で彼女は語る。

「せめて、最期の時は共にしたいと。それが私の願いですから」

炎が視界を照らし、従者に影を作り出す。

「……そのほう……本当に良いのか？」

「当然です」

ほんの僅かに頬が緩む。

「……そのほう……らしい……」

彼女も無言で微笑んだ。どこか誇らしげに。

静寂が訪れる。

夢を見た。

視界が歪む。もう時間がきたらしい。

そして、従者をここに留めて置く事も許され無いだろう。それならば。

「……」

揺らぐ意識。軋む体。翼に手をかける。羽を取り、従者の手へ。視界は白く。

「——をしない——さ——！」

既に力が入らない。体が冷えていくのが分かる。

「後は……」

幽かな嗚咽が聞こえる。

「生——わった——ても、も——度貴——の——にな——」

臆気に聞こえる声。眩む眼中の光景に、微かに忌むべき物語主義者の姿が映り込んだ。夢は途切れた。

目覚めは最悪だった。未だに揺れる景色の幻覚を見ながら、ゆっくりと上半身を起こす。苔むした祠の隙間から僅かに漏れる朝日。せせらぎ、鳥の声、騒がしい静寂。

ふと隣に手を伸ばした。空を切った手のひらに、一抹の寂しさを覚えた。そこには誰もいなかったし、何も無かったはずだというのに。

なんととはなしに六畳程の祠の中を見渡す。所々隙間が空いて、そこから日光が差し込んでいる。角には蜘蛛の巣が貼られ、少々みすぼらしい有様だった。

「……掃除でもするべきか」

もし仮にも彼女ともう一度出会った時。このような有り様では締まらないだろうか。